

一卵性双生児における性格差異と相互依存関係について*

東京大学
古畑和孝**

I 問題

従来から、双生児法は遺伝と環境との関係についての有力な実証的研究方法と考えられ、遺伝生物学的又は遺伝心理学的見地から、数多くの研究がなされてきた。その研究法の多くは、ある特性に関して一卵性双生児（以下E Zと略称する）と二卵性双生児（以下Z Zと略称する）との対差を比較考察したり、或いは、別々に離れて生育したE Z相互間の差異の検討をなすことにより、その遺伝規定性や環境規定性等をば、数量的に把握しようという方向にある。

これらの果してきた役割は大きいとはいえ、E ZとZ Zの比較という時、当然前提とされているE ZとZ Zとの環境同一との仮定に関しては、種々の論議がなされている。(11)(14) 又、別々に離れて生育したE Zと対比して、一緒に生育してきたE Z対についても、環境同一と称するようである。(12) 然し乍ら、遺伝質同一とされるE Zの、而も何等かの身体的基礎を特には有さない対偶者間に於いて、尚多少ともみられる性格面での差異に留意するならば、環境をもつと機能的に解し、心理学的な環境の分析を試みることも必要であると思われる。

ところで、従来の研究はE Z対偶者間における性格差異を問題にするにしても、その多くは、結局それは表相的なものであり、詳細に探究するならば、本質的には益益一致の度が増大するといった如くに、(8) (41) 性格学的にその素質性を強調していく立場からならされている。然し乍ら、本研究に於ては、敢えて、パーソナリティ理解における生物—社会的 (bio-social) な見地(1)から、寧ろ表面化された基本的行動的特徴にこそ焦点を向けんとするものである。

かくの如き意味において、筆者は、所謂同一な環境に生育してきたE Z対偶者間の、その過程において発現してくる性格差異に着目していこうとしたのである。その

際、一般児に比して著しく特徴的要因たる対偶者の存在、従つて又その間の相互関係如何は、彼等の性格的特徴やその差異の顕現と密接な関係を有すると考えられるので、特にその相互依存関係の機制的解明も求められた。こうして、差異の現象、その原因についての考察から、日常生活場面や更には教育活動面への作用・影響についても、進んで追究しようとした。

以上は、次の如き教育的見地よりの要請にも因つてゐる。即ち、性格形成における環境的要因の果す役割を、その遺伝素質との関連において把握する一つの手がかりを得、それに基づいて、より望ましいパーソナリティ形成のための一つの基盤を得んとするものでもある。

II 研究対象及び研究方法

(1) 研究対象

以上の目的に即応する研究をなすためには、相当の対数の、行動観察・実験・其の他の便宜が得られる、確実な卵性診断に基いた双生児であることを要する。このような理由から、東京大学教育部附属中学校1年在学の双生児を、研究対象として選定した。

その構成は次の通りである。

- E Z……12組 (男女各6組)
- Z Z……4組 (男女各2組)
- P Z……2組 (異性双生児)
- U K(卵性不明)……2組 (男女各1組)

主たる対象はE Zであるが、Z Zも亦、比較検討のためにも、最後迄対象として続けた。

(2) 研究日時・研究方法

以下に述べられる研究は、大要次の3段階から成つてゐる。

① 第1段階 (28年6月上旬—7月中旬)

対象双生児を含む学級集団とのラポール成立への努力、従前の対象双生児に関する報告資料の蒐集、学校における諸行動の観察、各種性格テストによる各双生児対の大凡の性格特徴の把握——向性検査・適応性診断テスト・内田クレペリン精神作業検査・相互関係の表出に力点をおいて作成せるSCT・双生児共同体意識、兄—弟

* On Personality Difference and Interdependent Relationship in Identical Twins

** by Furuhashi, Kazutaka (Tokyo University)

的意識の看取を目的とした筆者の作成になる質問紙・自己を主題とした作文の課題等——

尚上記の諸検査は完全な性格診断の技術では勿論ないにしても、性格特徴把握の参考として、単にその数量的結果のみを固執することなく、自他（各双生児対毎に）の評定等をも適宜加えつつ、施行したものである。

② 第2段階（28年7月21日—26日）

東大附属野尻寮での集団合宿生活がこの段階に当る、全体としての性格像の把握、それと関連して相互依存関係の看取に努めた。

この場合、Gottschaldt (4) 並びに脳研の研究(8)に範を求め、各人毎及び各対毎に、起床から就寝に至る迄の全生活場面での種々の行動、反応様式、生活律動、気分の変化、日常の諸要求等に亘つて追求した。他の研究目的から参加していた諸氏の観察結果をも参考にし得たので、一個人の主観的観察に伴う諸々の不備・偏倚の危険は可成り除去されているものとみられる。

この結果を中心として、各対毎に性格の一致点・不一致点及び相互依存関係を、Cattell (3) の掲げる性格の基本的特性を南博 (7) 氏の整理した枠組を利用して記述した。

③ 第3段階（29年9月上旬—11月中旬）

実験がその主たるものである。この段階では、既に個々のE Z対並びにZ Z全般としてもみられる性格差異がやや明らかにされていたので、その主たるものたる、一方の独立・主導的、他方の従属・依存的関係に焦点を集中し、3系列に亘る課題解決実験を施行し、その反応様式を観点を定めて記述した。それと共に、内観採取・其の他を目的とした質問紙を作成して記入を求める他、随時補足的資料を蒐集し、結果の考察へと入っていった。

III 結 果

(1) 行動観察を中心としての概観

学校における、休憩時間・其の他の行動観察は集中的に一度（28年6月下旬—7月上旬）行つた他、随時11月中旬に至る迄週1～2度はこれを続けた。又、集団合宿生活では、特に包括的に観察した。そこで、これらの観察結果を根幹に、その他の資料よりの知見をも参照しつつ、各対毎並びに全般的傾向としての性格概観を試みた。が、ここでは後者の結果のみを簡単に記述することとする。

先ず、従来の諸研究は、いずれも、Z Zとの対比において、E Zの性格の類似度の極めて高いことを挙げているが、この観察においても、それは容認される。

然し乍ら、これらのE Zはいずれも、今迄の調査によ

る限りでは、特別の身体的欠陥が一方にのみ認められることはない対ばかりであるのに、少し仔細にみるならば極めて一致度の高いものも、可成りの変異域を有する対もある。

そこで差異に注目してみよう。E Zの中でやや差異の大と認められる対には、Tm, Nt, Ns（以上♂）Sk, Hm（以上♀）等があり、更にUK（卵性不明）ではあるが恐らくはE Zと推定されているIt（♂）の如きは、Z Zに匹敵する程、その差異が目立っている。以上の中Tm, Sk, It等は、E Zの中では身体的差異の最も顕著な者達である。即ち、Tm A（註：以後兄・姉とされる方をA、弟・妹とされる方をBと呼称する）は幼児結核に罹つた経験が、彼のやや特異な陰鬱さの少くとも一因であろうし、It A・Sk Bは、夫々It B・Sk Aに比して、可成り身体的発達が良好であるが、それに伴つて一層活潑で能動的である。他方It B・Sk A等は、それと対蹠的に活力やや乏しく受動的である。但し、これらはいずれも対偶者間の比較においてであつて、絶対的尺度によるものではない。

ところが、例えばNt・Ns等にあつては、身体的差異は目立たぬにも拘らず、他の対と比べると、やや差異が大きいのである。けれどもこの両対にあつては、兄一弟的態度はかなり明確ではある。一般にパーソナリティを決定する因子として、家族内における人間関係についてもよく分析がなされているが、特にE Z対におけるその差異を問題とする場合には、心理学的な環境的要因として、兄一弟的取扱乃至は彼等自身のその意識如何等が考慮されなくてはならないであろう。この意味において、兄一弟的態度の明確な対が、やや差異が顕わであると認められたことは、注目されてよいであろう。

以上の事実は、その相互関係と密接な連なりを有している。E Z相互間においても、何らかの形で多少とも認められた能動的一受動的、主導的一従属的傾向は、この観察の示すところによれば、Kt, Tm等を除いては、概してA児即ち兄・姉とされている方において、能動的・主導的な傾向を示したからである。

性格の差異が、果してどの領域で多くみられたかを、この観察だけから断ずるのは困難である。が、整理に用いた枠組によるならば、兄一弟的態度と最も関連する領域と一応解せられる“自己の行動に関する特性”の如きにやや多く、これに反して、Gottschaldt (4) の結論で、最も遺伝的に規定されているとした面に対応すると思われる“感情生活の特性”の如きにおいては、比較的差異が少く認められはした。

以上筆者は、行動観察を中心としての、E Z全般を通

じての大凡の傾向に関し、概括的にその結果を述べたものである。

(2) 兄一弟的關係

上記の観察結果からも判るように、性格差異並びに、相互依存関係を規定する要因を直ちに導き出すことは勿論できないにしても、E Z 相互間の問柄如何をみた時、やや一般的に、兄一弟的な関係は認められたのであつた。そこで、この問題に関しての、分析的な追究が試みられた。

まず、双生児自身は、この点についていかなる意識を有しているであろうか。それは、或いは質問紙（調査B及びH参照のこと）により、或いは個別的面接によつて探られた。第1表に表示されている如くに、殆んどの者が兄一弟的の自覚を一応は有している。そのうち半数以上は、前後3回に亘る形式を異にしての設問のいずれにおいてもそれを容認しているばかりか、家庭においてもかかる取扱いをしていると自認しているのである。N t, N s, N m, T n, H p, I i, U d等はその例である。

ところが、中には時によつてその反応を異にする者もある。質問の形式如何にもよるが、矢張りそれは兄一弟的な意識の明確でないことを示すものであろう。だが、11月中旬に行なわれた個別面接から導き出されたところによると、K tやS kにとてその意識（A児が自らを兄とし、B児が自らを弟と感ずる意識）は決してなしとはしないようである。ただこの両者においては、或いは知的に或いは身体的にB児の方がやや優越しているために、反応に動揺を来たすのである。又、O tの場合は、A児には可成り顕著な姉意識があるのに対し、B児も亦感情の分化も進み知的水準も高いだけに、独立・自主的たらしとする傾向が強く、妹的位置に立つことを潔よしとしないような事情に因つていと解せられる。更にT mにおいても、兄的・弟的意識は確かにはない。が、やや性格的に異常な点も見受けられる。T m Aは、半ば意識的に兄的な行動をとろうともしないのである。その故に、エゴの年令の割には強大なBは、Aを兄として立てる風を些かもみせないもののようである。

このようにみてくるならば、とも角も、先ずは殆んど全員が、一応はその自覚を有することとなる。

では、かかる自覚に伴つて、兄一弟的な差別的取扱いをなす事に対しては、彼等はどのように反応するであろうか。この問題をも含め、兄一弟的關係一般、双生児共同体意識等の表出を意図した調査B（註：28年6月上旬より11月中旬に至る迄に行なわれた調査AよりIに至る9種類の調査の一つである）は既に7月8日に施行したが、その設問15, 16及び第2表のそれに対応する部分

Table 1 兄一弟的關係調査の整理表

双生児名	兄一弟的關係項目	双生児の自己評定				家庭のしつけ・見解		者の印象	
		兄一弟的意識の有無（7月、質問紙による）	兄一弟的意識の有無（10月、実験に附随して）	兄一弟的意識の有無（11月、個別面接に際し）	家庭での兄一弟的区別に対する見解（11月）	Aを立てることの有無（3月、入試時質問紙による）	兄一弟的区別のしつけの有無（3月、入試時）	A・B間の兄一弟的意識の有無（3月、入試時）	家庭での兄一弟的しつけの有無（7月）
E Z (♂)	K t	A B	++	++	—	—	+	—	—
	N t	A B	++	++	++	+	+	+	+
	N s	A B	++	++	++	+	+	+	+
	N m	A B	++	++	++	+	—	+	—
	T n	A B	++	++	++	+	+	+	+
	T m	A B	++	±	—	—	—	—	—
E Z (♂)	O t	A B	—	++	±	—	—	+	—
	H m	A B	++	++	++	+	—	—	—
	H p	A B	++	++	++	—	—	+	—
	I i	A B	++	±	++	+	+	+	—
	S k	A B	++	—	—	—	+	A—B+	+
	U d	A B	++	++	±	+	+	—	—
U K ♀	I t	A B	++	++	++	+	+	+	+
	H s	A B	+	++	++	+	+	+	—
Z Z (♂)	H g	A B	++	—	—	+	+	+	+
	M g	A B	++	++	++	—	—	—	+
Z Z (♀)	S t	A B	±	++	++	+	+	—	+
	A y	A B	—	++	—	+	+	+	—
P Z	K t ♀	A B	++	+	—	—	+	+	+
	T j ♀	A B	+	+	+	+	—	A—B+	+

註： ++……顕著に有り +……有り
 ±……不明 —……無し

の結果によると、価値評価の観点の故もあつてか、大半は平等な取扱いをよしとしている。特にBにあつては、弟なるが故に多少とも控え目なるを余儀なくされること

調

査 (B)

が次の文をよく読んで { } の個所では、その中の適当な欄に○をした上で問いに答えて下さい。

誰にも決してみせたりはしませんから、本当のことを書いて下さい。

尙これは、自分と相手(双生児)とを比較して書く問題なのです。

1. 自分は { 兄弟 } だと思つていますか
姉妹
……{はい; いいえ; 分りません}
2. どうしてそう (1の答のように) 思うのですか (できるだけ詳しくその訳を書いて下さい)
3. 家の人(自分)を { 兄弟 } として扱つていると思ひますか……{はい; いいえ; 分りません}
4. よく知つている人達 (先生や親戚の人や近所の人達など) は、自分を { 兄弟 } として扱つていると思ひますか……{はい; いいえ; 分りません}
5. 友達は自分を { 兄弟 } として扱つていると思ひますか
姉妹
……{はい; いいえ; 分りません}
6. その人達 (3, 4, 5に書いた人達のこと) は、どうしてそのように (3, 4, 5の答のように) みてゐるのだと、あなたは考えるのですか (できるだけ詳しくその訳を書いて下さい)
7. 自分は双生児であるので、相手がいていいと思ひますか……{はい; いいえ; 分りません}
8. あなたはどうしてそう (7の答のように) 思うのですか
9. 家の人達は、自分達が双生児であることを喜んでゐるとあなたは考えますか
……{はい; いいえ; 分りません}
10. よく知つている人達は、自分達が双生児であることを、好奇心をもつてみてゐるとあなたは考えますか
……{はい; いいえ; 分りません}

あるとするならば、平等をよしとするのは尤もであると思はれる。しかるに、実際には、TmのA・Bの他、Hp B, Nm B, Ud B等は兄弟的取扱ひを当然として受容しており、これ等の者は、他に比して一層自然に兄弟的關係が成立しているようである。他方Hmの如くに、Aはそれを容認するのに、Bは否認するような対にあつては、事実その相互關係が必ずしも自然的でなく、多分に反撥的な面が認められている。

ところで、このような意識が発現し、關係が成立して来るためには、家庭や学校におけるしつけや態度如何が問題とされなくてはならない。この面についての研究は他にもあるので、ここには、28年3月対象双生児の父兄

11. 友達は自分達が双生児であることをうらやましがつてゐるとあなたは考えますか

……{はい; いいえ; 分りません}

12. その人達 (9, 10, 11に書いた人達) は、どうしてそう (9, 10, 11の答のよう) なのだとあなたは考えるのですか (できるだけ詳しく書いて下さい)

13. 自分は双生児 { ただの兄弟(姉妹)をもつ方が }
でなくて { ひとりつ子である方が }
いいと思うことがありますか

……{はい; いいえ; 分りません}

14. どんな時、どんな場合に、そう (13の答のように) 思うのですか (できるだけ詳しくその訳を書いて下さい)

15. 人が自分達のことを { 兄弟(姉妹)的 }
{ 全く平等に } みたり、扱つたりするのを、あなたはいいと思ひますか

……{はい; いいえ; 分りません}

16. どうしてそのように (15の答のように) 思うのですか (できるだけ詳しくその訳を書いて下さい)

17. 相手と比べてみて、自分は相手と似ている点が多いと思ひますか……{はい; いいえ; 分りません}

18. 相手は自分とよく似てゐると思つてゐるとあなたは考えますか……{はい; いいえ; 分りません}

19. あなたは、自分がどんな点で特に相手とちがつてゐると思ひますか

(できるだけ詳しく書いて下さい)

20. 他の人達と比べて、自分達は双生児であるので特に仲がよいと思ひますか

……{はい; いいえ; 分りません}

21. 他の人達と比べて、自分の気持など、相手に分つてもらいやすいですか

……{はい; いいえ; 分りません}

に記入を求めた質問紙による結果及び同7月家庭訪問に際しての評定等を利用して (第1表参照のこと) 簡単に一瞥するに止めたい。先ず、Nt, Ns, Tn, Ii, Ud等は、家庭にあつても兄弟的區別をしたしつけの下で生育したことの明らかな対である。そしてこれ等の対では、概して双生児自身のかかる意識も明確であり、行動的特徴にもそれらしさを示すことが多い。が、必然的に諸種の制約の伴う質問紙によつた故もあつてか、少くともこの調査による限りでは兄弟的區別をして育てたりはせぬとされた対の中にも、例えばNmの如く、双生児自身には兄弟的意識の明確に存するものもある。

Table 2 調査Bの一部についての整理表

双 児 生 名	質 問 項 目	兄一弟的 意識		双生児た ることに 対する態 度		他独 の兄弟 の合 のよ い有 場無		兄一弟的 平等 的 取扱い に 対 する 態 度		相互の 類似感		共同体 意識	
		自	家	自	家	自	家	兄一弟的	平 等 的	自	相 手 の 意 向	仲 の よ さ	意 思 疎 通
		己	人	己	人	己	人	己	人	己	人	己	人
E Z (♂)	K t	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ×	○ ○	○ ○	×	×	○ ○	○ ○
	N t	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	N s	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ×	○ ×	○ ○	○ ×	○ ×	○ ○	○ ○
	N m	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	T n	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	T m	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
E Z (♀)	O t	A B	×	○	○	○	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ×	○ ○
	H m	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	H p	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	I i	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	S k	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	U d	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
U K ♀	I t	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	H s	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
Z Z (♂)	H g	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	M g	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
Z Z (♀)	S t	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	A y	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
P Z	K t	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
	T j	A B	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○

註： ○ 肯定 × 否定 ? 不明

E Zにおける差異を問題にした時、性格概観の結果と相俟つて考えられた心理学的環境の一要因が兄一弟の関係であつたのだが、以上の諸結果から、筆者はE Z自身の意識のうちにも、家庭のしつけにおいても、将又具体的行動的特徴のうちにも、大抵の対において、多かれ少かれそれを認め得た。

(3) 共同体意識・同一視・反応の一致度

屢々双生児共同体として論ぜられるものを、その相互間に成立する愛や同情に基いた結合の見られる持続的な

関係として今理解するならば、その意識如何は、彼等の思考・行動様式にも通ずるものであり、従つて又、筆者のここに用いた性格理解の立場からも問題とされてよいものである。

調査B・第2表に示された設問の多く、及び調査C (SCT) に織り込み第3表に纏められたものは、このような意味において、その共同体意識をみたものである。

先ずその前者の結果をみるならば、次のことは明らかである(第2表)。E Zにおいては、その殆んどが自らの双生児たることをよしとして、“二人居るため”の喜びを味つているようである。それ故に又、その多くは、他の兄弟を持つことや或いは独り子であることを望むことを否定するのである。それから相互の類似感も強く、仲もよく意思疎通も良好と自ら肯んじる傾向がある。これ等の典型には、N s, N m, H p, S k等がある。ところが、E ZのH m, T m, O t B等の他、Z Zにあつては実に半数が、双生児たることをよしとしない。その理由として挙げるところを概括するならば、二人居るために自己の欲望の充足が阻止されると感ずるからであるといえよう。それらは、相互の類似性を寧ろ認めぬ傾向にあり、共同体意識も強くない。

次にSCTに現われた結果をみよう。それは後に触れるように、12の範疇から成り、その一つとして構成した双生児の相手への態度が共同体意識の表出を意図したものであるが、ここには第3表に示した7項目からそれをみた。各項目毎に「共同体意識」の認められる反応には+

否定的反応には-、中性的反応及び無応答には0を与えた。全体としての評定は、総合的に考察した結果、「共同体意識」の顕著に認められるものを+2、認められるものを+1、普通を0、余り認められぬものを-1、特に忌避・嫌悪を示すものを-2 というように、5段階に評定したものである。今評定のための反応の分類の例の一つを示すならば、(22)私達二人は()に対して、「仲がよい」「仲よくしたい」「大きくなつても別れない方がいい」「もつといい人になりたい」等と反応した

Table 3 SCTによる共同体意識の評定

双生児名	SCT番号 及び項目	2 31 22 36 28 42 56								全体としての評定
		若かつしも相手がいな	私は私の相手に	私達二人は	小私達二人は	私達二人は	私の双生児である	私は将来相手と		
E Z (♂)	K t	A B	— +	0 0	0 0(x)	0 0(x)	+	+	0 0	(+1 +2)
	N t	A B	+	0 0	+	+	+	0 +	+	(+2 +1)
	N s	A B	+	0(x) +	0 +	0 +	+	+	+	(+2 +2)
	N m	A B	+	+	+	0(x) +	+	+	0(x) +	(+2 +2)
	T n	A B	0(x) 0(x)	0(x) 0(x)	+	+	+	+	+	(+2 0)
	T m	A B	0 0	0(x) —	— —	— 0	0(x) 0(x)	0 0(x)	0 +	(-1 0)
E Z (♀)	O t	A B	+	0 0(x)	+	+	0(x) 0(x)	0(x) 0(x)	+	(+1 0)
	H m	A B	0 +	0 0	+	+	0(x) 0(x)	0(x) 0(x)	+	(0 +1)
	H p	A B	0 +	+	+	0 +	+	+	+	(+2 +2)
	I i	A B	0 0(x)	— 0	— 0(x)	0(x) 0(x)	+	+	0(x) 0(x)	(0 0)
	S k	A B	+	+	0(x) +	+	+	+	+	(+2 +2)
	U d	A B	+	— —	0 —	0 +	+	+	0 —	(+1 +1)
U K (♂)	I t	A B	0 0	— —	— 0	0 —	— +	— +	— —	(-1 -1)
	H s	A B	0 +	+	0 —	+	+	— +	0 +	(0 +1)
Z Z (♂)	H g	A B	0 0	0(x) —	+	+	+	+	0(x) 0(x)	(+1 -1)
	M g	A B	0 0	— 0	+	+	— +	0 +	0 0	(0 +1)
Z Z (♀)	S t	A B	0 +	0 +	— +	+	+	— 0(x)	— +	(-1 +1)
	A y	A B	+	+	+	+	+	+	0(x)	(+2 +2)
P Z	K t	A B	— 0(x)	+	— +	— +	— 0	— —	+	(-2 0)
	T j	A B	0(x) —	0 0	— —	— +	— +	0(x) 0(x)	0(x) 0(x)	(-2 0)

註: (x)なる記号は、無応答なることを示す。

ものには+を、「やせている」「にいていないといわれた」等の如きには0を、更に「とてもよくけんかする」「仲が悪い」等には-を与えたのである。さて、これによつてみても、EZは一般に共同体意識が大であるが、ZZではAyを除いては、EZ程ではない。然し乍らEZにも相互間に差異が見られるし、又その意識の強くない対も存する。Tm, Ot, Hm, Ii等はそれであり、これ等の者は、行動的にもやや異なりをみせる点が多い。

それでは、以上と関連して、相互を同一視したり、或

いは差異を殊更に際立たせようとする傾向などのようなものがあるか。

種々のテストにおいて、筆者は各双生児対偶者間で夫々自他の評定を求めたが、その応答・反応様式を、①各自の自己及び相手(対偶者)に対する不一致評定度 ②A・B夫々の自己評定の不一致度 ③A・B両者によるA評定及びB評定の不一致度 ④全評定(A・B両者の自他評定)の一致度等に分つて考察した。そのうちの①は、不一致評定度がそのまま当該特性の差異の多少を現わすとみるよりは、寧ろ各双生児の自己とその対偶者の同一視の程度を示す一つの徴表と考えることが出来るよう。

例を第4表に示した田中向性検査の結果についてみるならば、Nm, Ud, Hp, Kt等は不一致評定の少なかつた者達であり、これに対し、Ns, Ot, Hm, Sk等は、全50問中A・Bとも夫々10問以上については、その自他評定の不一致な者達である。この両群を対比的にみるならば、傾向としては、前者は相互依存的・協力的であり、後者は各自が比較的独立自主的であるとは云えるであろう。

次に②③④等A・Bの評定を比較した結果はどうであろうか。多くの検査(そのうち田中向性検査についてのみ第4表に掲げたが)において目につくのは、EZにおいても案外不一致評定の多い事実である。勿論、ある性格検査結果から、直ちにその被験者の性格を断定することは出来ないにしても、かかる統制的場面において、EZ

でもかなり異つた反応様式を呈することに注目するもの、ここでの性格理解の立場に立つ限り、意味がある。このような見地から、反応の不一致度と、行動的特徴との関連をみた。一般に一致度の高いNm, Hp, Ud等は、行動の基本的傾性においてもその差小と認められており、Tm, Sk, Nt等不一致度の概して高い者達は、いずれも差異の比較的大きい対である。又、試みにEZとZZの評定の不一致度を比べると、顕著な程ではないまでも、EZの方がその度合がやや小さい事実(例

Table 4 調査D (田中) 向性検査結果

E Z 名	向性検査	各自の評定					A・Bの評定の比較		
		外向点	無応答	向性指数	偏差値	自評己不相一手致	A評定 ・B ・C ・D ・E ・F ・G ・H ・I ・J ・K ・L ・M ・N ・O ・P ・Q ・R ・S ・T ・U ・V ・W ・X ・Y ・Z	上段 A ・B ・C ・D ・E ・F ・G ・H ・I ・J ・K ・L ・M ・N ・O ・P ・Q ・R ・S ・T ・U ・V ・W ・X ・Y ・Z	下段 A ・B ・C ・D ・E ・F ・G ・H ・I ・J ・K ・L ・M ・N ・O ・P ・Q ・R ・S ・T ・U ・V ・W ・X ・Y ・Z
K t	A	23	0	92	44	1	17		
	B	22	0	88	42	1	18		28
N t	A	29	0	116	55	5	17		
	B	28	0	112	52	5	23		18
N s	A	20	0	80	38	7	19		
	B	23	0	92	44	7	23		18
N m	A	27	0	108	51	11	26		
	B	22	0	88	42	11	17		20
T n	A	30	0	120	57	16	17		
	B	34	0	136	64	16	17		20
T m	A	28	0	112	53	14	14		
	B	28	0	112	53	14	17		33
O t	A	27	0	108	51	0	17		
	B	27	0	108	51	0	17		33
H m	A	28	2	116	55	4			
	B	26	2	108	51	4			
H p	A	17	11	90	43	1	7		
	B	13	24	100	48	(14)	7	(25)	13
I i	A	10	30	100	48	3	(25)	6	
	B	9	30	96	46	3	(25)	(21)	
S k	A	28	0	112	53	10	19		
	B	24	0	96	46	10	21		19
U d	A	27	0	108	51	14	17		
	B	31	0	124	59	14	17		
H m	A	21	5	94	45	11	18		
	B	24	5	106	50	11	19	(5)	16
H p	A	25	1	102	49	13	14		
	B	14	1	58	28	13	14	(5)	
I i	A	24	8	112	53	6	10		
	B	24	8	112	53	6	11	(8)	27
S k	A	35	0	140	66	0	11		
	B	35	0	140	66	0	(7)	10	
I i	A	24	1	98	47	4	14		
	B	22	10	108	51	(9)	(12)	11	—
S k	A	25	3	106	50	10	13		
	B	31	3	108	51	10	18	(5)	17
U d	A	27	4	116	55	11	(6)	21	
	B	16	4	72	35	11	(6)	(6)	
U d	A	28	0	112	53	0	12		
	B	28	0	112	53	0	12		37
U d	A	26	0	104	50	1			
	B	27	0	108	51	1			

註：不一致中()内にあるのは一方は無応答で、他方は外向内向のいずれかに評定したものの数を示す。

例えば田中向性検査では全評定の平均一致数は、 $EZ = 22.8 \pm 7.6$; $ZZ = 13.4 \pm 5.9$ 。又適応性診断テストにおける平均不一致度は、 $EZ = 0.30$ $ZZ = 0.36$ から、これ等反応の不一致度は、A・Bの性格差異をみるに当つて、その一つの参考資料になり得ると解せられる。

ただSCTの結果に現われたA・B間の反応の一致度は、幾分その他諸テストとは趣きを異にする。このSCTは12の範疇から成り、各範疇につき4問毎(但し双生児の相手への態度についてのみ12問)が含まれるようにしてあるので、先ず、12の範疇のうち、反応の少くてA・B間のよく比較できぬもの及びどちらともいえないものを除いて、その一致・不一致をみた。次に全56項目中、A・Bが共通して応答しているものにつき、比較し得る反応を、各項目毎に一致・不一致に分つていつた。その結果は第5表に示された如くであるが、EZにあつては、特異の点の認められるTmとそれにUdを除いては、対偶者間の反応には、可成り同質的なものを認め得た。ところがZZでは、Ay以外はいずれも、異質的反応が多くみられたのである。SCTの主たる目的が、それを通して他人や環境や社会に対する態度・感情・葛藤等を察知せんとすることに存することを思うならば、Gottschaldt(4)の、内部感情基底層では高度の遺伝的素質が作用するとの結論を思うにもつけ、この結果は一応興味あると云えよう。

IV 結果(2)——実験

前節の結果、就中その(1)(2)において、EZにおける性格差異を規定する一要因として、兄一弟的な関係を認め得た。そしてKt, Tmを除いては、それは、一般的にみて、Aがやや主導的であり、Bの方が幾分なりとも従属的なのであることも判つてきた。

そこで、危機的場面においてはパーソナリティの表出が最もよくなされるとされるので、かかる観点から、双生児対偶者同士が、主導—従属的關係を鮮明に表出するよ

Table 5 SCTに対する反応の一致度; 不一致度

双生児名	SCT		全体の項目(12項目)に対する反応		無応答数	A総・B共通反応数(56項)	比(同系統反応総数)	個々の項目に対する反応		(附録) 提出順位
			一致数	不一致数				一致数	不一致数	
E Z (♂)	K t	A B	4	1	2 31	24	12	8	4	4 10
	N t	A B	6	3	9 2	45	20	12	8	13 20
	N s	A B	8	0	2 4	49	23	16	7	30 11
	N m	A B	5	0	26 32	20	10	9	1	15 14
	T n	A B	2	1	19 39	13	7	4	3	23 24
	T m	A B	3	6	4 12	42	25	7	18	25 7
E Z (♀)	O t	A B	5	1	6 20	31	13	9	4	32 33
	H m	A B	4	0	26 3	27	13	10	3	17 18
	H p	A B	7	0	5 19	35	18	13	5	35 (欠席)
	I i	A B	1	0	21 34	20	12	7	5	21 9
	S k	A B	5	0	21 20	21	16	15	1	27 26
	U d	A B	2	3	2 0	54	30	14	16	37 36
U K ♀	I t	A B	2	4	1 2	53	24	9	15	22 3
	H s	A B	0	4	12 6	39	17	6	11	34 39
Z Z (♂)	H g	A B	3	4	18 16	29	15	5	10	12 8
	M g	A B	1	5	14 7	38	21	7	14	16 28
Z Z (♀)	S t	A B	3	5	1 3	45	20	6	14	1 2
	A y	A B	4	1	13 14	31	18	13	5	19 29
P Z	K t	♂ A B	3	3	2 26	29	15	6	9	31 33
	T j	♂ A B	3	3	15 9	35	15	8	7	5 6

うな実験場面を構成し、その下において、彼等の反応様式を適当に観察し、これを整理していくならば、自然発生的場面におけるよりも一層著明に、その相互関係、そして又、その性格差異の実態を把握し得るのではなからうかと考えるに至った。ここにおいて、次の実験を計画実施したのである。

(被験者) 相互関係のよくみられぬ P Z 2 組を除いた対象双生児すべて

(実験時日) 28年9月5日より10月14日まで

合計 11 日間

(実験場所) 東京大学教育学部附属学校研究室

但し10月2日・3日は、東京大学教育学部三木研究室

〔実験目的〕

課題解決過程において危機的場面を現出せしめ、その反応様式を三つの観点より看取りし、記述すること。

① 個々の双生児の課題解決の目標に対する態度

② 双生児における、かかる場面での、競争と協力の力関係

③ 相互関係

(i) 指導的——従属的

(ii) 独立的——相互協力的——依存的

(iii) 協調的——反撥的

〔実験手続〕

一対の双生児を被験者として、一つの課題を提示し、実験系列毎に目標を設定し、解決途上2度に亘る教示によってそれを変容し、双生児各自及び各対間の反応様式を記述する。

尚その他に、実験Ⅰに際しては、その直後に、質問紙(調査H)への記入を求める。

〔実験材料〕

① 実験Ⅰ・Ⅱ 課題用紙1枚並びに解答用紙各1枚(課題は6種類用意した)。課題は、数量的(一見簡単そうにみえて、取りかかるとなかなか解決の困難な、中学校2～3年程度の数学の応用問題)・言語的(笠信太郎・天野貞祐・山本有三の文章の一節ずつをとり、それをばらばらに分解してあるのを、完全な文章に復元

させる問題)なものとし、実験Ⅰ及びⅡでは、夫々別の領域のものを課した。

② 実験Ⅲ パズル1組(所謂ラッキー・パズル、七つの小片を使つて、種々の形態を作成させるパズル)

(実験Ⅰの手続)

〔教示1〕 課題を示して、1人でやつたら10点、2人で協力してやつた場合には1人7点である旨を告げ、然し乍ら合図がある迄は別々にやらなくてはならないとの注意を与えてから開始する。

この条件下で約5分続行させる。そして次に、〔教示2〕 2人でやつてもよいが、その場合は7点ずつしかと

れぬ旨を告げる。こうして又、約3分間継続していく。その間に、フラストレーションを起させるような言辭を、屢々刺戟として与える。例えば、“少しもできないじゃないか、だめだぞ”とか、“もう時間が少ししかない”といった具合に。

そうしてから最後に、〔教示3〕時間があと僅かしかないから、2人で協力して7点ずつでもとつた方がよいのではないかと、協力を勧告する。そして、それから約2分後に止めさせる。尚実験後には、直ちに、フラストレーションを解消させるための策は講じておく。
(実験Ⅱの手続き)

実験Ⅰのそれと全く同様であるが、ただこの場合異なるのは、2人で協力してやつても、目標の得点を10点与える旨を強調することである。
(実験Ⅲの手続)

〔教示1〕パズル1組と課題図形とを提示して、どのようにしてやつても、できたら10点だが合図をする迄は、進んで相談したり協力し合つてはいけないうを宣言する。

開始後3～5分後に、〔教示2〕として、2人で相談し乍らやつてもよいとし、最後に〔教示3〕において、時間の切迫を告げ、2人の協力の勧誘を試みる。

実験は、各双生児対に対し、Ⅰ—Ⅲ—Ⅱの順で日を更えて行い、又2回目以後、手続きの大要を知つて、そのために目標に対する誘因の減ずることのないように、実験前に夫々説明を附したりもした。

〔結果の整理〕

① 各対毎の詳細な観察記録から、実験目的に示された如く、実験Ⅰ・Ⅱについては、目標に対する各双生児の態度は、これを更に(i)目標指向性(ii)安定度(iii)注意力のような観点から、前記3項目の相互依存関係と共に、その夫々を+2, +1, 0, -1, -2の5段階に評定した。

例えば競争—協力関係については、特に教示によつて

Table 6 実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおける相互依存関係整理表

実験 双生児名		実 験 I 及び II							実 験 III			
		個々の態度			競争—協力関係	相互依存関係			相互依存関係			
		目標指向性	安定度	注意集中度		主導的—従属的	独立的—依存的	協調的—反撥的	主導的—従属的	独立的—協力的補助的	協調的—反撥的	中心
E Z (♂)	K t	=	=	=	=	B	B	A	B	B	=	B
	N t	=	(A)	=	(A)	=	-B	(A)	A	=	=	(A)
	N s	=	=	=	(A)	A	(A)	=	A	A	-B	A
	N m	=	(A)	(A)	=	A	A	=	A	=	=	A
	T n	A	=	A	A	A	-B	=	A	=	=	A
	T m	=	(-A)	(A)	=	=	=	-A	=	A	-A	=
E Z (♀)	O t	=	(-B)	=	(B)	=	(B)	(-B)	A	A	=	A
	H m	A	=	A	A	(-B)	=	B	A	A	=	A
	H p	(A)	=	=	A	A	(-B)	=	A	=	A	(A)
	I i	(A)	(-B)	A	(-A)	A	(-B)	A	A	B	-B	(A)
	S k	=	(-A)	=	=	B	=	=	=	=	(A)	(A)
	U d	=	(-A)	=	=	A	-B	B	A	A	-A	A
U K ♀	I t	(A)	=	=	=	(B)	A	=	A	=	=	(A)
	H s	A	=	A	A	(-B)	A	(-B)	A	A	-B	A
Z Z (♂)	H g	=	(-B)	=	A	(B)	=	A	=	B	A	=
	M g	A	=	A	A	A	A	-A				
Z Z (♀)	S t	=	(-B)	=	B	=	=	(-B)				
	A y	=	(B)	=	=	A	=	=	A	=	(B)	A

註： 1) A又はBと附してあるのは、その傾向の顕著なのがA又はBであることを示す。

2) ()を附してあるのはややその傾向が大きいことを示す。

3) =の符号はA, Bいずれが大ともいえないことを示す。

4) -を附してあるのは、一方向でその傾向がみられる事を示す、例えば協調的—反撥的で -A とあるのは、共に協調的ではなく反撥的であるが、特にAは一層反撥的であることを示す。

相互がどのような反応を示したかにつき、あく迄も1人で、協力を拒み自らの答案を左手でかくし乍らやるものを、競争意識の顕著なものとして+2とし、又、協力容認と共に、直ちに協力しようとするような反応を、協力への意識濃厚なものとして-2に評定するようにした。

② 実験Ⅲについては、目標に対する態度を、(i)洞

察的一試行的 (ii) 全体的一部分的 (iii) 集中の一散漫的 (iv) 持続的・一易變的というように、パズルに対する取扱い方から、同様に5段階に評定した。相互依存関係については、実験Ⅰ・Ⅱと同様に評定した他、材料がパズル1組なので、好むと好まぬとに拘らず、直接パズルに触れているのは一方だけであるところから、その回数と、延時間の概略をも記入した。

③ 次に、実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを通じて、各対偶者相互間の相対的な比較に重点をおき、夫々の面において、A・Bのいずれがその面での傾向が顕著かを検討して、これを3段階に分ち記入した。ここには、紙数の関係上、この表のみを記載した。(第6表)

④ 実験Ⅰの直後に記入させた質問紙に対する反応は、内観をとる目的をも含んでいたが、これを次の観点から評定記入した。(調査H)

(a) 相互協力・依存への態度

(b) 競争と協力への態度

そして附随的に、従前よりの筆者の知見を、緊張した体験の直後で確かめてみる意味で、

(c) 双生児における兄一弟的關係の意識

(d) 双生児たることに対する態度

等をもみた。その評定方法の詳細は省略するが、要するに20の設問は、夫々aからdまでの4範疇の1乃至2に属しており、各問毎に、積極的・肯定的な反応には+を、中性的な反応には0を、消極的・否定的な反応には-を附し、それを集計していつたのである。

⑤ 最後に、前節で概観した諸テストに対する反応の一致度を、殊に危機的場面を経過した後の、相互関係に関する設問によつて確かめる意味で、相互間の反応を検討した成績を、纏めていつた。

〔結果とその考察〕

① 先ず課題解決過程における対偶者間の態度を比較するならば、EZの多くはZZよりも反応様式がやや類似しているかに見えるが、EZのA・B間にはさしたる差異はみられぬ。然し乍ら、EZのうちNm, Tn, Hm, Iiの4組では、Aは一層熱心であり、Bはやや投げやりの傾向が認められる。

② 次に相互関係に着目するならば、一般にEZでは、相互に依存し合い協力し合う傾向が多くみられる。特にNm, Hp, Sk, Ns, Tn等において著しく、その他Nt, Ii等もその中に入れられる。ところがZZでは、AyとそれにUKのItを除くすべては、非協力的であつたり、能力のまさる方が一方的にやつたりしていた。が、EZにおいても、Kt, Tm, Ot, Hm, Ud等は余り協調的ではなかつた。KtはBの方が優れ

調 査 (H)

1. 私達二人が一つの目標に対して競争する時、私は(
2. 私達二人が一つの事を協力してやるのは(
3. 或る事がらを、相手だけができて自分ではできないと、私は(
4. 自分が出来たのに相手が出来ないと、私は(
5. 一つの仕事を私達二人でやっている最中に、私はよく相手に(
6. 一つの仕事を二人が別々にやらなければならないと思うと(
7. 自分一人でやれば10点とれるのに、二人で協力してやれば7点ずつしかとれない時私は(
8. 点数が定まっている時(例えば7番のように)私達が一つの事を、相談したり、協力したりするのは(
9. 二人で相談してやつてもよいと云われると、私は(
10. 私は、相手に相談しかけることを(
11. 相手は私に相談しかけることを(
12. 相手に頼まれたり、尋ねられたりすると、私は(
13. 私は二人の中では(兄弟姉妹)だから、相手に対してよく(
14. 私は二人の中では(兄弟姉妹)であるのに、相手は私に(
15. ふだん私達は()であるけれども(
16. もし相手が他の人などとけんかをしているのを見ると、私は(
17. 相手だけが可愛がつてもらふことは(
18. 他の人に知られぬような二人だけの合図・信号は(
19. 私達は双生児であるので(
20. 双生児であるけれども、私達は(

ているためと解せられ、Otは競争意識の激しさ、UdはAのやや専横的なこと等によるもののようである。

③ 協調的であるにせよ、或いはそうでなかりうと、多くの場合、多少とも主導的・従属的な関係がみられたが、その明確な者はNm, Ns, Tn, Hp, Ud, Ii等であり、僅かにKt(Sk)のみがBの方が主導的であるのを除いては、予測された如くすべてAの方が主導的なのである。

④ ③に対応して、依存的傾向の強いのは、Kt以外は、いずれもNt, Tn, Ns, Hp, Ud, Ii等Bである。A・Bとも依存的でないのは、Ot, Tm, Hm, Sk, Ns等、自我意識の強大で独立自主性に優れている者や、Nsを除いては兄一弟の關係の鮮明でない者ばかりである。

⑤ 競争・協力関係を、実験ⅠとⅡとの結果を、各対毎に比較検討することによつて次にみてみよう。実験Ⅰ

では、2人が協力すれば出来ても各々7点ずつしかとれない規約であつたのに対して、実験Ⅱでは、協力しても10点とれるとしたのであるから、実験ⅠとⅡにおける態度の推移をみることにより、実験的に生起されたプラスチックの事態で、彼等の相互関係の緊密さを推知する手がかりが得られると解せられるからである。

今その結果を示すならば、次の如くなる。

(a) I・Ⅱとも協力的

(i) $I < Ⅱ \cdots I i, S k, H p, I t (UK)$

(ii) $I = Ⅱ \cdots T n$

(iii) $I > Ⅱ \cdots N m$

註： $I < Ⅱ$ とあるのは、Ⅱにおける度合がⅠにおける度合よりも大なることを示すものである。

(b) I競争的Ⅱ協力的 $\cdots N s, H m, U d, N t, A y (Z Z)$

(c) I協力的Ⅱ協力的 $\cdots$ ナシ

(d) I・Ⅱとも競争的

(i) $I > Ⅱ \cdots K t, O t$

(ii) $I < Ⅱ \cdots H g (Z Z)$

尚ZZの中、Mg, StとUKのHsの3組は、実験Ⅱを省略したが、それは、Mg, Hsは余りにも歴然と、能力のまさるAが競争的であるのに対し、Bは依存的であること、又、Stは相互に回避的であることによつてゐる。

この結果は次のように要約できよう。

目標(2人協力の場合の)を7点から10点とする時に、確かに多くの対では、或いは一層協力的となり、或いはやや競争的關係が緩和される傾向が認められ、就中、Ⅰでは寧ろ競争的關係の方が強かつた対で、Ⅱになるとより協力的に変化した者すら見受けられた。又、(a)に属する対は、可成り相互依存・協力が緊密なものと一応認められる。

⑥ 調査Hの結果においても

(a) 相互間の極めて円滑で協調的なもの $\cdots H p, S k, N m, N s, T n$

(b) 協調的 $\cdots K t, I i, U d, N t, H m, I t, A y$

(c) 一方が協調的、他方が非協調的 $\cdots M g, S t, H g, H s$

(d) 非協調的 $\cdots O t, T m$

となつており、上記の諸結果を、大体において裏付ける方向にある。

⑦ 兄一弟的關係についての意識、反応の一致度等は、前節における結果と、ほぼ同様な成績を得た。

以上の如くにして、危機的場面を通じて、EZの相互

依存関係と、そしてそれと関連しての性格差異の一端を把握することができたのである。

V 要約と問題の展開

従来の双生児法とはやや観点を異にして、所謂同一環境において生育したEZ対偶者間において発現して来る性格差異を、その相互関係との関連において研究することを志したものである。

そこで筆者は、卵生診断の確実な東大附属中学校1年在学双生児20組(EZ12組・ZZ4組・PZ2組・UK2組)を研究対象として、学校並びに集団合宿生活での行動観察、種々の性格診断法を併用して、各対の性格特徴を把握し、その差異を検出することに努めた。

その結果、従来の諸研究が、いずれも性格における高度の類似を強調しているにも拘らず、その社会的契機を重視していく限りにおいては、案外差異を見出したし、諸テストの結果でも、ZZに比すればやや類似しているとはいえ、A・B間に可成りの開きがみられた。而も大凡の傾向としては、その開きの大小、反応の一致度の高低が、性格差異評価の一資料たり得ると解せられる。

ところで、その差異の原因としては、固より先ず、身体的・生理的条件が考えられるべきであろうし、事実、一般的にみて、身体的差異の大なる対に、性格差異も亦大なる傾向が認められ、その差小なる対は、性格差異も小であつた。

それ以外に差因の原因を求めるならば、心理学的な環境的要因として、相互依存関係との関連において、多少とも兄一弟的の取扱いを受け、又自らもかかる意識を有するところから成立する兄一弟的な関係が考えられる。そしてこれ等の明確な対においては、矢張り差異が比較的に顕著である。

この関係の表出を計つた困難な課題解決場面での実験の結果によつて、危機的場面での行動的特性として、一般的にみて、主導的・従属的關係が看取され、加えてその相互関係における協力・競争関係について若干の知見を得た。

EZにおける相互依存関係は、性格における間柄的關係として問題になつたものであるが、これはZZに比するならば、一般には意思疎通も円滑・良好であり、所謂双生児共同体意識をも見出し得た。が、この“二人なるが故に”の特徴は、両者が全く平等・対等な関係としてあるのではなく、寧ろ先にも見た如く、多少とも相寄り(B)相倚られる(A)関係ににおいてあるようである。其の他、この間が極く自然的・円滑である対から、何らかの摩擦・抵抗を感じるような対に至るまでの存在や、

その原因、或いは同一視の問題等についても考察を進めた。

最後に、教育的見地から、今後この観点からの研究の推進のためにも、一・二の点に簡単に触れておきたい。

EZが、遺伝質同一とされているところからも明らかのように、心的構造の下層部においては、極めて高度の一致を示すのは当然である。が、現実の生活においては、遺伝的な規定に因りつつも、“上層部の世界が意識的には優勢を占め、自らの行動を統御し、主権性を担っている”(6)ことを思うならば、EZにおける兄一弟的關係が、その行動面において、Aの主導的Bの従属的な傾向への分化に導いていったことは、望ましい性格の形成を考慮するに当つても、充分注目せられてよいであろう。この意味でも、EZにおける性格差異は、今後大いに追究されてよからう。

EZにおける主導—従属的關係は、知的要因によつて規定されるとの論があるようである。(8) 確かに対象双生児について、その学業成績や知能検査結果をみても、現象的にはそうである。成績の相対的によい方は、主導的とされる者に、大体相当しているからである。

が、遺伝質同一の仮定が正しく、身体的器質的条件が特に異なるところないならば、主導的であり成績の良好な者は、多くはA児であるところからみても、主導的—従属的關係の成立が、逆に学業成績などにも影響を及ぼしているのではなからうかとの推論も可能であろう。とに角、一般に、学業成績と心的構えとの連関を考察するに当つても、この種研究が一つの素材を提供することが期待される。

これ等、問題の今後の展開のために、その一二を指摘するだけでも、一層充実した精細な実証的研究を、長期に亘り、発達史的に続けることが必至と思われる。そうする時はじめて、ここに提供された問題も、進展するかもしれないであろう。

稿を終るに臨み、終始懇篤な指導を忝けなうした指導

教官三木安正教授はじめ諸先生方、並びに直接材料蒐集其の他に援助を与えられた嘱託木村幸子氏、附属学校関係各教官に対し、謹んで感謝する。

文 献

- 1) Allport, G. W.: Personality—A Psychological Interaction. 1937.
- 2) Burlingham, D.: Twins: A Study of Three Pairs of Identical Twins. 1952.
- 3) Cattell, R. B.: Personality 1950.
- 4) Gottschaldt, K.: Erbpsychologie der Elementalfunktionen der Begabung. Justs Hdb. d. Erbbiol. d. Mensch. V/I 1939.
- 5) 正木正・依田新: 性格心理学 昭和23年
- 6) 正木正: 性格教育について 児童心理, 1巻5号
- 7) 南 博: 社会心理学 昭和24年 p120~123
- 8) 岡田敬蔵・諏訪望: 性格学と双生児研究 木下良順編 医学の進歩 第6輯 昭和24年
- 9) 佐藤幸治: フラストレーション 心理学講座第6巻IV 1953.
- 10) Stern, C.: Principles of Human Genetics 1949.
田中克己訳: 人類遺伝学 1952 p306~339.
- 11) 11) Stumpfl, F.: Erbpsychologie des Charakters. Justs Hdb. d. Erbbiol. d. Mensch. V/I 1939.
- 12) Verschuer, O. F. v.: Die Zwillingsforschung als Methode der Genetik vom Menschen. A. S. N. 13-19. 1949.
- 13) Verschuer, O. F. v.: Ein altes und ein neues Problem der Zwillingsforschung. A. GE. ME. GE. Vol I. 2. 1952.
- 14) 山下俊郎: 教育的環境学 昭和24年版 p37~76